仙台司教区 教区事務所だより

（第　49　号）
昭和56年11月1日

『聖書』を　信仰生活の中心に！

＊聖書週間＝11月15日～22日

日本司教団は、いまから五年前に聖書週間を制定し、「王であるキリスト」の祭日を含めて前の主日からの八日間をこれにあてた。今年は11月15日から22日までが聖書週間。私たちキリスト教徒にとって、神のみ言葉をつたえる聖書がいかに大切なものかはあらためて述べるまでもない。とりわけ新約聖書に示されるイエズス・キリストの福音は、私たちの信仰生活に直接ふれて指針を与えるものといえる。しかし現実に、私たちは日常の生活でどれほど聖書を身近に置いているだろうか。神のみ言葉である聖書にどれほどふさわしい態度で接し、聖書を認識しているだろうか。こうした反省が聖書週間を生みだすきっかけとなった。とにかく、聖書に親しもう、聖書を身近に置こう、そして聖書が何であるかを正しく知るように努力しよう、というのが聖書週間のねがいにほかならない。

ところで五年たった聖書週間だが、私たちは一体なにをしたらよいのか、という声もすくなくない。カトリック教会に聖書週間があることさえ、まだ知られていない気もする。仙台教区全体としても今年の聖書週間に特別な企画はない。聖書週間にかかわる諸行事については、各教会、地区に委ねられた。聖書週間を推進している聖書使徒職委員会は、今年もパンフレット「聖書に親しむ」第五号を各教会に配布したが、そのなかで委員長平田三郎司教は具体的な催しの例をあげて聖書週間の盛り上がりを期待している。各教会、地区でこうした行事が行われ、聖書週間が有意義に利用されてほしい。

しかし聖書週間の本当のねらいは、この一週間の行事にあるのではない。聖書週間の行事によって聖書に対する関心を高め、それを私たちの日常の信仰生活における聖書への親しみ、聖書への理解と結びつけること。私たち信徒の一人ひとりが聖書を信仰生活に生かすことである。

聖書は神感によって書かれた神のみ言葉であるから、私たちキリスト教徒にとっては信仰の原点である。よいことが書いてあるからといういわゆる座右の書としてだけでは足りない。聖書に親しむ、ということの中には、聖書を信仰の源泉として尊重する心がまえが含まれているべきだろう。主日のミサには必ず聖書（旧約、書簡、福音）が朗読されるが、正しく、ふさわしく、うやうやしくなされているだろうか。機械的に、義務的に、下手にはなされていないだろうか。聖書週間のねらいを実践する、ひとつの良い機会である。

司教様の日程

（10月16日現在）

11月1日　白河教会司祭館落成式
2日　教区司祭団役員会
3日　イメルダ幼稚園落成祝賀会（八戸）
6日　スペルマン病院理事会
8日　会津若松ザベリオ学園講演会
9日　社会福祉法人理事会（仙台）
13日　司教協・財務小委員会（東京）
16日～21日　教区司祭団黙想会（東村山）
23日　久慈教会堅信式
27日　神学校常任委員会（東京）

1981・年間目標

家庭を通して
キリストの愛をひろげよう
（仙台司教区）

二十年ぶり『青森県信徒大会』教皇訪日を機に再開

去る9月27日(日)、青森市明の星高校を会場に、青森県内14教会から約五百人が一堂に集まり、第一回青森県信徒大会が開かれた。

第一回とは言うものの20年前に開かれた事があり、その後途絶えており、今回気持ちも新たに再出発したものである。

信徒大会が盛会であったことはすでに10月18日付のカトリック新聞で報道されたが、その背後には、数年前から司祭達の間で大会を開きたいという希望が生まれ、信徒会長レベルの県信徒連絡協議会（指導司祭児山六七男神父）の綿密な計画を実行委員会が受けて、短い時間をいかにスムーズに会を進めて行けるかなどを十分検討し準備したかいあって今回の成功に至ったといえよう。

大会の目的は、「県下の老若男女が一堂に集まり、親睦をはかりながら、信徒としての在り方を考える」というもので、今年度の教区目標である「家庭を通してキリストの愛をひろげよう」をメインテーマとした。

午前の講演で佐藤千敬司教は、慈父的な打ちとけた態度で信徒に話しかけ、たとえ損をしても、キリスト者としての真実に生きる姿勢を崩さない様に、と激励され、参加者に深い感銘を与えた。

午後は、それぞれの分科会に分かれた話し合い。特に「祖先崇拝と教会」コーナーでは日頃疑問や悩みを持っている事を出し合い、解決法を探すなど、有意義な話し合いが行われた。

幼・小学生は市内の教会巡礼を行い、それぞれ充実した一日を過ごした。

日頃の主日のミサは10人程度という小さい教会の多い青森県だが、この日は五百人以上が参加した熱気あふれるミサに雰囲気は最高潮に盛り上がり、この恵みを他の人々にも分かち合おうと、その使命を確認し合い、再会を約して感激の内に、第一回青森県信徒大会を終了した。

カテキスタ会　研修会

＜盛岡＞

夏のなごりをとどめる初秋、9月13日～16日までの三泊四日、教区カテキスタ10人（岩手6、福島3、青森1）が、盛岡ベトレヘム宣教会本部に集まった。現代の人々にどう福音を伝えたらよいのか？と思案にくれる私たちに、管区長は、年に一度カテキスタの養成のため、わざわざ講師を招いて研修会を開いてくださるのだが、今年は聖書学の第一人者である神言会の三好油神父をお迎えして、「現代聖書学による聖書の基本的見方」について学ぶよい機会を与えられた。短い日程を有効に実りあるものになるようにと、一日3回の講話を夕食後の自由時間も返上して4回にしていただき、その上食事の時であれ、お茶の時間であれ、イエズスをとり囲んで主のみことばに聞き入った使徒たちもさぞやと思われる意気込みで、講師の内面からあふれ出る熱気こもる確信に満ちた言葉を、一言一句聞きもらすまいと、真剣に耳を傾けた。

日本では、まだ現代の神学を受け入れていない面もあり、18・19世紀の神学に基づいて学んだ人々にとっては、ヨーロッパの進んだ現代の神学はラジカルに受けとられるだろうが――と前置きして、復活信仰（原始教会が如何にして発展していったのか？聖書が編集されるに至った経過について）、神の子、主の洗礼、誘惑、奇跡（変に伝えられてることの正しい見方について）、神の国（貧しい者・小さい者への福音）、最後に降誕についての順で語られた。この研修会で得たものを伝えるには余りにも多すぎて紹介できないが、時間をかけて、紹介された沢山の参考文献（聖書と理解、イエスの宣教、神の国と教会、イエスの最後の晩餐、等々）をもとにじっくりと消化し深め、自分のものにしていきたい。そして、受けた豊かな恵みをただ自分の中にとどめておかず、徐々に、色々な形で信徒に、まだ知らない方たちに伝える使命があるのだと、一人一人が決意を新たにし、宣教の熱意に燃えてそれぞれの場に帰って行った。

＊　＊　＊

（四ツ家教会　村上）

気仙沼教会
宣教百周年を迎える
―宮城県内では二番目―

パリ外国宣教会のル・マレシャル神父が、気仙沼地方に布教をはじめたのが一八八〇年（明治13年）。翌一八八一年には七人が洗礼を受け、気仙沼教会が誕生した。それ以来一世紀を経過して、今年は宣教百周年。去る9月27日に気仙沼教会宣教百年祭が行われた。

記念行事のひとつとして、午前十時から、佐々木博神父（仙台教区・現在日本宣教司牧センター所長）の講話。第二の宣教百年に向けてスタートする気仙沼教会にふさわしく、福音宣教の勘どころを具体例をあげながらの話しに、有意義な催しとなった。十時からの感謝のミサは、教区長佐藤千敬司教が青森県信徒大会に出席のため司教総代理三浦平三神父が主司式。主任土井勝吾神父、佐々木博神父とともに、前々主任として十五年間在住した小野忠亮神父（現在青森藤の園付）も共同司式に加わった。ミサ終了後は幼稚園で祝賀会。近隣の諸教会代表、女子修道会代表らも出席して、気仙沼教会の盛儀を祝福した。

気仙沼教会は、宮城県内では元寺小路教会について二番目に出来た由緒ある教会。一九〇九年（明治42年）に建てられた現在の聖堂は、パリ外国宣教会時代をしのばせる明治時代の貴重な建造物で、東北大建築学部にリスト・アップされている。現在、宣教百周年を期してさらに発展を目ざし、教会敷地の再整備が計画されている。このため幼稚園・司祭館は改築の予定だが、由緒ある聖堂は残される。

百年の歴史をもつ気仙沼教会は信徒数約二百二十人だが、三代、四代にわたる実力をもつ信徒家庭が多く、また在住した司祭も土井辰雄大司教（日本最初の枢機卿）、レミュ司教（オタワ大司教）とユニーク。

現主任土井勝吾神父は目下、建設計画で信徒の先頭に立ってがんばっているが、丘の上の教会にとどまらず、坂を下りて市民と一体になる新しい教会のあり方を願っている。

「聖書百週間」に挑む！
＜野田町教会＞

「聖書百週間」という聖書の分かちあいの方法がある。福島市野田町教会でも、主任のモリゾン神父を中心に集いが開かれている。水曜日の午前中は家庭婦人のため、金曜日の夜は勤め人のためと週二回。それぞれ十人前後の人が集まる。

きめられた聖書の個所を読んで黙想し、集会の席で受けた光を各自が分かち合う。批判や議論は一切しない。聞き合う事に意味があるからだ。週一回で百週間はたいへんだが、これがなくなったら寂しい、とは参加者の弁。

聖書を
知ることは
キリストを
知ること

平和の巡礼
第三回 仙・塩地区夜間ハイク
＜仙台＞

去る9月22日午後十時から翌朝にかけ、「平和の巡礼」をテーマに、ロザリオの祈り、黙想、そしてお互いの親睦をはかりながら、仙台市内六教会を巡礼する催しがあった。参加者は中学生をはじめ、最年長は五十八歳になられる石川晃さん（元寺小路）、シスターも含めて、各教会の青年を中心に約四十人。

コースは元寺小路教会を出発して畳屋丁、一本杉、東仙台、北仙台、西仙台の各教会を訪れ、青葉城趾、殉教碑を通り、元寺小路教会にもどる約26キロの行程。この夜間ハイクは元寺小路教会青年会が主催し、ロザリオの祈りと黙想をしながら平和を祈るためのものであった。

街のざわめきも静まり返った真夜中の聖堂、そこで参加者が心を一つにしてのロザリオの祈りは何とも格別。巡礼中は各班ごとに黙想をしたり、お互いの親睦につとめたり、なごやかな雰囲気だったが、後半には疲れと眠気におそわれて、お互い励まし合う場面もしばしばだった。

青葉城趾、広瀬川畔でのロザリオの祈り：数分も歩けばビルの立ち並ぶ街中だというのに、何と素朴な働きだろう。忘れかけていた素朴な信仰をこの夜間ハイクに感じたような気がする。こんな身近な所で素晴らしい体験ができるとは思いもよらなかった。

（寺小路教会・佐井満雄記）

医療と宗教（下）

臨床医から見た「祈り」の必要性

前田敏行（スペルマン病院長）

今日、臨床医学の一分野に「心身医学」があります。それは心の中でも、意識体系の範囲外にある部分、すなわち、意識の下にあって意識から隔離された精神の深層領域を問題にしています。

私が興味をもつのは、昨年10月号の医師会雑誌で、「医療における人間性について」と題した話の中で、京大の河合隼雄教授が、意識のおよぶ範囲をこえた心の深層を「魂」という言葉で表現していることです。そして、教授は現代人の悩んでいる心の層は、非常に深いと述べています。

河合教授は、あちこち移動する腹痛と肩痛を訴える四十歳の女性の例をあげています。「この女性は四十歳になるまでに良い夫をみつけ、子どもを生み、家を建てるなどして、自分の人生観なり、そういうものを作り上げるのに成功した。成功したあとで知らねばならないのは、そういう自分はどうして年をとって、どうして死んでゆくか、そういう大きな問題である。ところが悲しいことに、意識体系の方があまりしっかりしているので、心の底からの信号を受けとることができない」。その心のき裂が体の痛みとして表現されることを、心理療法の過程でとらえておられます。

この心身症的要素は、今日、あらゆる疾患において、多かれ少なかれ認められること、また人間の身体を扱う場合に心を問題にせざるをえないことがわかっております。

病人、特に死に臨む病人の「死」に対する態度、死というものをあえて意識しようとしない心の空白、それによる患者の苦しみは、私たち臨床医が日ごとに、現実に見ているものです。「いかに死ぬか」という問題が、病人の苦しみに、それを意識すると否とにかかわらず、深くかかわっている以上、医療は本質的に哲学、あるいは宗教に関与せざるをえないのです。

哲学者パスカルは、「われわれはイエズス・キリストによってのみ生を知り、死を知る。イエズス・キリストをよそにしては、生の何たるか、死の何たるかを知ることはできない」と述べていますが、究極において、医療は宗教にかかわらざるをえないものでありましょう。

アフリカ難民救援特別キャンペーン
〜〜実施中〜〜

仙台司教区の皆様、あなたの教会ではアフリカ難民救援のため、何をして下さいましたか。7月から始まったキャンペーンを引続き行っています。新しいポスターも教会に送られるでしょう。

コーヒー一杯、タバコ一箱分のお金がアフリカの飢餓にさまよう一人の生命に等しいのです。

助けて下さい、彼らを！
救って下さい、彼らを！

春秋

去る2月の「教皇訪日」は、信者は全教会の牧者である教皇のもとに一つなのだということを肌身に感じて知ることが出来た良い機会であった。

同様に、仙台司教区においては、全教区の牧者である佐藤千敬司教のもとに一つなのであるが、それがもっと具体的に身近に感じられるような機会を作れないものかな、と思う。数人の司祭からもそのような声があった。勿論、信徒大会があり、また堅信式とか何かの式典等が各地の教会で行われるので、司教の「姿を見」「話を聞く」機会はあるにはある。だが信徒の側からもざっくばらんに話しかけたり質問したり出来る機会というと、大してないというのが現状だろう。

そこで提案したいのだが、集まり易い場所を定め、誰にでも関係あって話し易い話題を見つけて、たとえば一か月間毎週何曜日の何時から何時まで誰が来て何を喋ってもいいという、司教を囲む集まり、を開けないものだろうか。話題の材料としてたとえば、人間が働くということの意味が扱われている教皇様の最新の回勅「労働について」（今年中に邦訳が出る模様）は格好のものであるし、他にそれこそ自由に見つけて取り上げることもできよう。

まずは、反応や如何？

（司教区事務所・平賀徹夫）

読者のページ

「感激」

大湊教会　阿部一美

9月13日(日)、必要にせまられて教会へ。イエズス会の時永神父様が教会に来られ、ミサ前に一人の若い女性の入信式を司式された。時永師は、「入信式の前に」と言われて、あいさつされ、「この女性は私の聖書研究会のメンバーで2年程勉強を続けていたが、入信には至らず、今回研究会のグループが当別のトラピスト修道院へ黙想に行く途中、彼女だけ一足先に大湊に寄り、横島神父(時永師と同窓)と何か話があり、何かこつ然と入信に至ったものです。横島神父と何の一言があったのかは不明ですが・・」と話し入信式に入った。

入信式が進み、信徒の皆が祭壇に進み、入信者の額に十字架を印した。

私は、このために教会に来た訳ではない。突然の成り行きに驚き、「私ごとき罪深い者の汚れた手で十字架を?」と思いながらも、清純そのものの入信者の額に、「おめでとう」と、少しのどをつまらせて述べ、十字を印した。私の心は、清められた感じで一杯。

この日の福音は、「際限のない神の罪の許し神から許された私達に比べると、私達が兄弟を許すことなどたかが知れている」と述べる。

これらを私に伝えるために、今日ここに招かれたのであろうか。心中深く感動するものがあった。

日頃親しみ、身近過ぎて気づかなかった横島神父様への尊敬と信頼の念を深くして、当地にあることの幸いを、今更ながら覚えた。

でも、彼女を変えた〃その一言〃とは、一体どんな教え、どのようなお話だったのだろうか。

映画紹介

「アウシュビッツ、愛の奇跡」

「マキシミリアノ・コルベ神父」、カトリック教会では親しみのある名前と思っていたが、意外にも、名前さえ知らない者が多いという。いま、朝日新聞に連載中の遠藤周作氏の小説「女の一生」にも描かれているが、コルベ神父は昭和5年から六年間、宣教師として長崎に在住、極貧の中で、すさまじいまでに働いた。「聖母の騎士」誌の発行、新修道院の建築等、ようやく仕事が軌道に乗ったかに思われた昭和11年、突然ポーランドに帰国命令が出る。三年後のナチス・ドイツ軍のポーランド侵攻、そして一九四一年(昭和16年)、聖職者ゆえに逮捕されアウシュビッツ収容所へ送られた。

周知のように、アウシュビッツでは地獄絵のような中で人々は次々と殺されていった。同年の夏、一人の脱走者の見せしめのため十人の囚人の餓死刑が宣告され、「死にたくない!」と狂乱する妻子ある囚人の身代わりを申し出たのがコルベ神父であった。餓死室に入れられて三週間後、まだ息のある神父はついに毒殺された。一九四一年8月14日聖母被昇天祭の前日、享年四十七歳であった。神父に助けられたガヨヴィニチェク氏はその後救出され、八十四歳の現在列聖調査の証人となっている。〃友のために命を捨てる〃福音の愛を実践した映画としてすすめたい。

囚人番号16670、コルベ神父の輝ける死、いまよみがえる愛と平和の祈り……

ドキュメンタリー・ドラマ映画 11月より全国ロードショー

アウシュビッツ
愛の奇跡
コルベ神父の生涯

脚本・監督／千葉茂樹

●11月11日㊌ 宮城県婦人会館
仙台市錦町1-1-20☎22-7721

上映時間　第1回 PM 2:00～ 第2回 PM 6:30～
入場券　前売券大人600円(当日 900円)
〃　小・中学生400円(当日 600円)

企画・製作●女子パウロ会・近代映画協会

● お問い合わせは― 女子パウロ会
〒980 仙台市本町1-2-12　☎(0222)23-8639

おらが教会(13)

気仙沼教会

漁港、とりわけサンマの水揚げ港として、また、森進一の港町ブルースに歌われ、日本中にその名が知れわたっている町、気仙沼。その気仙沼の港を見下ろせる小高い丘の上に建っている明治の建物、それがおらが教会である。

気仙沼教会は、明治13年に、フランス、パリ外国宣教会のル・マレシャル神父様の蒔いたからし種によって産声を上げた。

〝陸の孤島〟と言われた難路のこの地へのジャック神父様の熱意に満ちた巡回司牧の支えにより、明治20年にコシェリー神父様を初代常任司祭として迎え、宮城県下第二番目の教会として創設（現在の丸光気仙沼店がその場所）された由緒ある教会である。

日露戦争や太平洋戦争で、教会を追われたり収容所に入れられたりしたセスラン神父様やリード神父様、そして日本で初めて司教となられた早坂久之助神父様（大・5）、また、邦人枢機卿第一号の土井辰雄神父様（昭・3）など、歴代の主任神父様の布教への熱意が、親から子へ、子から孫へと伝わって、三代目、四代目の信徒が多いことからもうかがえるのである。

現在の教会聖堂は、明治42年に建てられたゴチック様式の素晴らしい建物で、ステンドグラスに囲まれた荘厳味のある聖堂は、他に類を見ない聖堂と自負出来るものである。聖堂の正面には、はめ込みの際棟梁が間違えたのか、それとも意味あってのことか、文字が反対に見えるところを見ると、表裏反対とも思える「幼きイエズスと聖母マリア」の御絵入りステンドグラスが、日差しを背にしてくっきりと浮かび上がり、信徒に優しい眼差しを注いでいる。まさに聖堂と言うに相応しい雰囲気をかもし出している。

また当教会は、昭和23年に、付属幼稚園として認可された園児数62人の幼稚園がある。信徒数180人。普段のミサには、二回のミサで50人位の出席率、復活祭、クリスマスとなると百人を超える。これも特徴の一つ。また古い信徒の家庭が多く、青少年の中には五代目の信徒の数も少なくない。それが逆に、燃える信徒としての影を薄めた感もあったが、今年は宣教百年目、信徒は、改めて冷たい水で顔を洗い、宣教百年の事業として老朽化した幼稚園舎から、新たな聖堂兼幼稚園舎建設へと力を注いでいる現状で、9月27日には、宣教百年記念式典を司教総代理・三浦神父様をお迎えして行っている。

主任司祭の土井勝吾神父様は、建設関係、財務関係と諸事万端、何事にも詳しく、小柄でチョビッと太り気味、頭のテッペンが少々透けては見えるが、ガッツな神父様で、特にその歌声は素晴らしく、巷でのカラオケの評判もよく、信徒間のみならず、一般の市民の方々をも魅了する四十三歳の若々しい、おらが教会の牽引車に相応しい素晴らしい神父様である。この神父様のもとで、今から始まる新たな百年に向かっておらが教会は、力強い第一歩を踏み出そうとしている。（M生）

一口メモ

'81 国際障害者年

◉手足の不自由な人は、階段や乗り物の昇り降りが大変です。声をかけて手を貸しましょう。車イスの昇り降りを手伝うには、昇りは前向き、下りは後ろ向きで、二、三人で呼吸を合わせ、静かに持ち上げます。

◉目の不自由な人を手引きするには、肘や肩に軽く手を触れてもらい、同じ歩調で手引き者が半歩前を歩くことが大切です。

◉障害のある方々との触れ合いを通して、「共に生きる社会」の実現をめざしましょう。

【編集後記】●教育研修会で、「事を始める時の意味、動機づけ」が問題との話があった。抽象化、公式化する習慣は、人間の思考力、行動力を鈍くする。恐ろしい。●我が教会の思考と行動は鋭敏だろうか。

仙台司教区事務所だより49号
昭和五十六年十一月一日
発行所　仙台司教区事務所
〒980 仙台市本町一丁目2番12号
TEL 0222 22 7371